

# GOLF、 今この人に 聞きたい!

ゴルフの楽しみ方は十人十色。  
各界を代表する著名人たちが  
独自のゴルフ観を告白する!

「世界の本物を  
見ていただく  
ただきたいんです」

## 島津隆司 さん

特別連載 第22回  
株式会社ジエットアンドスポーツ 代表取締役



聞き手

山崎将志  
(やまざきまさし)



1971年生まれ、愛知県岡崎市出身。ビジネスコンサルタント。94年に東京大学経済学部経営学科を卒業。同年アクセンチュア入社。2003年に独立後、アジルパートナーズ、カジタクなど数社のベンチャー企業を開発。10年4月に出版された『残念な人の思考法』(日本経済新聞出版社)が34万部のベストセラーとなり、著書累計発行部数は100万部を超える。最新のハンディキャップは7.5

ゴルフ雑誌をめぐっていると、よく海外のメジャー大会観戦ツアーや名門コースを巡る旅の広告を目にする。今日のゲストは、われわれ筋金入りゴルファーに、30年にわたってゴルフの旅を提供してきたツアー会社の社長、島津隆司さん。

事務所を訪れると応接室には壁一面に写真が飾られている。近くに寄って見るとただのスナップではない。ジェイソン・デイがコースで夫人や子供と一緒にほほ笑んでいるカットや、かわいらしい女の子たちが戯れているのを傍らで見つめるルーク・ドナルド……。マスターズのパー3コンテストでのひとコマのようだ。

「マスターズは世界ナンバーワンのトーナメントであることは間違いない。しかし、その前のパー3コンテストが、究極のイベントだと

私は思っています」

食い入るように写真を見つめる私に、島津さんはこう話した。パースコンテストの位置づけは、パトリックを楽しませることだけを目的にしたイベント。世界中から集まったトッププロのプレーは本戦以上に真剣。それでも、プレーヤーは家族をロープの中に同伴することができると、パトリックは試合で見る姿とはまた違ったスター選手の一面を垣間見られる。また、ギャラリーも比較的自由に写真撮ることができるといふ。

「2000年に初めて行き、とても衝撃を受けました。こんなシーンが毎年のように繰り返されているなんて考えられない。これをライフワークとして撮り続けて、日本にこれが世界のゴルフ文化だと知ってもらいたいと、本気で考えるようになりました」

島津さんが今の会社を始めたのは今から30年ほど前の1986年のこと。大学卒業後に、北海道のスキー&ゴルフリゾートに就職した。支配人として経験を積んだ後、本社のある東京に転勤。旅行商品を企画・販売する仕事を拡大し、数年後に今でいうスピンアウトという形で創業した。その後、ゴルフツアーのビジネスは順調に伸びていくが、バブル崩壊

後、ゴルフ場の数が増え、オンライン予約ができる環境が整ってきただけから、国内ツアーのビジネスは頭打ちになる。

そんな中、島津さんは95年に初めて全英オープンを訪れた。その第124回大会ではジョン・デリーとコスタンチノ・ロッカの激戦、その歓声の地響きに感動して日本にぜひ伝えたい、と海外のメジャー観戦ツアービジネスに参入する。

準備期間は5年。00年からマスターズのツアーをスタートさせ、10年からは4大メジャーすべての観戦ツアーを提供できるようになった。観戦ツアーの「グランドスラム」達成である。

「そのころの日本には、4大メジャーを観戦するなんていう文化はありませんでした。私も観戦できなかった。でも、観戦できないという発想すら、ほとんどの方は持っていなかったと思います」

前述のとおり最初はオーガスタから始まったが、ツアー参加者からは一生の思い出になった、と大反響を呼んだ。そこで島津さんは、さらに世界の本物

## 「観戦ツアーにおけるグランドスラムを達成しました」

を見てもらうという使命感を強め、全英、全米プロと広げていき、ついに10年の全米オープンの観戦ツアーを実施して、グランドスラムを達成する。

### 「ゴルフはアート」

「私にとっては、ゴルフは出合ったときからビジネスなんです。毎日コースを眺めて働いていましたから、ラウンドしたくて仕方がありませんでした。でも、ゴルフは面白すぎるだけに、羽目を外して夢中になりすぎるとロクなことがありません。この仕事はちよつとストイックな性格じゃないと務まらないんです。だから今まで続けられてきたのだと思います」

たとえ、ゴルフが大好きであってもゴルフに関係するビジネス、特にゴルフツアーを扱うのであれば、じつと我慢してお客さま優先で考えられるかどうかが鍵だ。自分のプレーを優先してしまうと、お客さまのために世界中を回るのはつらい。だからゴルフが上手になりきれないほうが

私わなければ仕事にならない。プレーしないカメラマンは連れていけないから、自分でプレーしながら写真も撮る必要がある。

そんな状況ではOBを打ったら写真撮っている場合ではなくなくなってしまふ。だからフェアウェイキープが絶対条件。これにはかなり高度な技術と集中力を要する。体力と知力、両方の勝負だ。ゴルフのショットのときは、フェアウェイの真ん中に打つことを考える。そして歩いている間に、写真のショットのためにコース内の写真映えるスポットをキョロキョロと探す。ゴルフに集中したい絵は撮れないし、写真に集中したらショットが曲がる。いい写真を撮って帰ってこない遊びにいったと社員から怒られてしまうから、若いころはシャカリキになって練習した。ラウンド後、練習場に直行して徹夜で1000球打ったこともあった、と笑いながら話す。

事務所飾られている島津さんによる写真は、生々しく、美しい。動きのあるカットは躍動感にあふれ、笑顔はこちらも自然に口角が上がってしまふほどである。特に、アングルが秀逸だ。「これらは、プレーをする自分と、コースの美しさを伝えたいという自

分が共存しているから撮れたのだと思います。ゴルフがショットするところとシャッターを押すところは、けっこう似ているんです」

の時代の権丸(ツイワン)の絵だ。数百年前に描かれたものだという。ゴルフがこれだけ長く歴史の洗練を受けながらも続けているのは、ギリシャ哲学の「真善美」に則っているからだ。島津さんは推測する。「真」は審判不在でプレーヤー自らがすべてを



フ場をショットバリエーの高いレイアウトでゴルフの心に残るようなアートにしたからだ。そう考えると、いいアングルが分かってくるという。すると、島津さんはある写真を指さした。写真に収められている絵はゴルフの起源ともいわれている、明

ジャッジする点。以前大学の体育の先生がゴルフに審判をつけるべきだと主張していたことがあるが、そうした時点でゴルフではなくなってしまう。それくらいゴルフは真実に対して信頼を置き、敬意を表している。「善」はルールブック。前文に、他の

ビジネスはうまくいく、と。それでも、お話を聞く限り島津さんのゴルフの腕前は相当なもの。しかし、それは仕事上の制約のためなのようだ。

島津さんは若いころから世界中でゴルフをしていたが、決して遊びにいつていたわけではなかった。パンフレット作りを行っていたのだ。そのコースが旅行商品になるかどうか、つまり商品のレビューが目的だ。ところが海外のコースは実際にお金を払ってラウンドしなければコースを見ることができない。ケースが多い。1000ドルを要求されても支

### T・ウッズのお宝写真が!



「27年間にわたってダニロップフェニックスの観戦ツアーを実施してきました。2006年にタイガーが来日したとき、「タイガー好き限定カメラマン」グループに入れてもらうことができました。今でもこれはフェニックスの廊下に飾っています」(島津さん)

プレーヤーに対する配慮などに関することがすべて記されている。そして「美」は文字どおりコースの美しさだ。「ゴルフは生涯果てしなく続くロマンス、生きる力です。スコアに、飛距離に、道具に、尽きることはない。夢遊び、世界中の美しいコースのラウンドもその一つです。こよなくゴルフを愛する人々の(生涯の思い出づくり)にお役に立てる幸福をかみ締めながら、これからもスタッフ一同フェアウェイを歩き続けてまいります」といいます。

帰り際に参考資料として机の上に置かれていたゴルフ旅行のパンフレットを手にとった。よく見ると30年前に企画されたものだった。今置かれていてもまったく違和感のないデザイン。そして何よりも、表紙の写真からはそのコースの素晴らしさを伝えたいという島津さんの思いが伝わってきたことに、ハッとさせられた。

### 島津隆司さん (しまづ たかし)

1949年7月13日生まれ、北海道出身。立教大学卒業後、北海道函館市近郊のゴルフリゾートに勤務。その後、86年に日本初となるゴルフ専門旅行代理店「株式会社ジェットアンドスポーツ」を創業した。ゴルフ好きが高じて、社内にはロフト&ライ角調整機器もある。100ヤード以内はすべて1ピン以内に寄せるのが夢だそう。ベストスコアは72。また、カメラにもプロ並みに精通している。